

Title	新垣宏一「砂塵」論：「異文化を見る」という視点
Sub Title	
Author	和泉, 司(Izumi, Tsukasa)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2003
Jtitle	三田國文 No.38 (2003. 12) ,p.30- 46
JaLC DOI	10.14991/002.20031200-0030
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20031200-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新垣宏一「砂塵」論―異文化を見る―という視点

和泉 司

はじめに

新垣宏一（一九一三〜二〇〇二）は、日本統治期（一八九五〜一九四五）の台湾で文学活動を行っていた在内地人作家の一人である。他の多くの在作家たちと同様に、彼の文学活動は現在、日本近代文学において全く顧みられていない。ただ、新垣の場合は、台湾南部の都市・台南に高等女学校教員として赴任していた時期に、その地を舞台にして描かれた佐藤春夫「女誠扇綺譚」を巡る現地調査をした人物として、わずかに文学史に足跡を残しているが、作家としての新垣宏一への言及は、ほぼ皆無である。

もともと、それは新垣宏一に限った話ではない。日本文学の領域において、日本統治期台湾、そして旧植民地・占領地の文学活動にまで視野が広がるようになったこと自体、ここ十年ほどの状況に過ぎないからである。³

ただ、そのような状況を踏まえてもなお、問題視したいことは、現在定着しつつある旧植民地文学研究、ここでは日本統治期台湾の文学研究とするが、その中で、本島人作家への視線と

在内地人作家たちへのそれとが、質・量ともに釣り合っていないという点である。日本でも台湾でも、「日本統治期台湾文学」の研究領域で注目されるのは圧倒的に本島人作家たちなのである。

もちろん、それが間違っているというわけではない。当時の文学研究において、まず被支配者として、支配者の言語を習得し、それを使用して文学活動を行わなくてはならなかったという彼ら本島人作家たちとそのテクストに対する検討は切実に求められるものである。

しかし本島人作家たちへの検討が重要であるからこそ、そのとき彼ら本島人作家たちにそのような状況を強いることになった「日本」、その「日本」の側に属していた在内地人作家たちへの検討もまた不可欠なのではないだろうか。是非はあるとしても、当時の台湾では、本島人作家と在内地人作家たちとが相互に影響を授受しながら文学活動を行っていたことは確かであり、である以上、その一方のみへの注目では、全体像の把握が困難になることは間違いないのである。

支配者の側であった在内地人作家の、台湾における政治的

権力的な位置は、今日的な評価からいけば批判を免れることはできない。しかし、明らかな批判対象だからといって、だから検討する必要もない、ということにはならないはずである。ここで求めているのは、彼ら在台灣内地人作家たちの「復権」であるとか「地位向上」であるとか、そういったことではない。彼らへの批判が不可欠だとして、ではどのような批判を加えるべきなのか、ということをも、「内地人だから」という最大公約的な理由によるのではなく、在台灣内地人である「彼」、そして「彼の描いたテキスト」という、個々の作家そしてテキストのレベルでの検討によってより深化したものにしていきたいのである。

日本統治期台湾の文学に対する先行研究において扱われたことのある在台灣内地人作家は、まず西川満、そして坂口襦子、浜田隼雄といった人物たちである。特にこの中で、西川満という作家の、当時の台湾文壇での存在感があらゆる意味で非常に強烈であったために、先行研究のみならず当時の台湾文壇においても、彼に「在台灣内地人作家」を代表させてしまっている感がある。が、当然ながら、本島人作家たちにもそれぞれの個性があったように、在台灣内地人作家たちにも個性があり、それらは必ずしも「西川満的」なものではない。そのような在台灣内地人作家観の縛りを解くことも、今回の目的の一つである。

このような問題意識を持った上で、新垣宏一という作家を扱おうというのは、まず第一には、新垣が今までの在台灣内地人作家研究において殆ど注目されていない作家であるからだが、第二に、彼が西川満と対照的な面を持っている作家であったとい

うことが挙げられる。「西川満的」なものから脱却しようという目的において「西川満的」なものとの対照性を論じるのは、結局それから自由になり得ないということの逆説証明に陥る可能性があるが、ここではそれを、目的への端緒としてまず大切な過程であると考えておきたい。

新垣宏一と日本統治期台湾文壇

日本統治期台湾の文学活動といっても、その統治期間が五十年にも及んでいる以上、それをひとくくりにしてしまうことは出来ない。日本統治期台湾の文学史の詳説は先行研究の成果に委ねたいが、今回、中心として扱う時期は一九四〇年から四五年までの、いわゆる「日本語文学」最盛期である。

日本統治期台湾の文学活動で、日本語を用いた活動が出てくるのは三〇年代の「台湾新文学運動」期半ば頃からだが、この時期の文学活動は本島人が中心で、内地人の参加は全体から見ればごく少数であり、影響力も少なかった。それが、一九三七年に「台湾新文学運動」が頓挫してから二年強の文学活動低迷期を経て、四〇年に日本語芸誌「芸芸台湾」が登場して以降、台湾文壇は、在台灣内地人作家がその中枢に関わる形で活動するようになる。このとき、台湾のメディアで使用出来る言語はほぼ日本語に限定されており、また戦時下に入って言論統制が厳しくなっている中、権力側に絶対的に「近い」位置にある在台灣内地人作家が主導権を握るようになったのは当然の成り行きでもあった。

そして、新垣宏一は、三〇年代から文学活動に関わっていた

数少ない在内地人作家の一人であった。三〇年代当時の新垣の活動は目立ったものではないが、それでも、四〇年代の多くの在内地人作家が三〇年代の本島人中心の文学活動に無関係か距離をとっていたという中では、一つ彼の特徴として記憶しておく必要があるだろう。

ここには、新垣の経歴も関連していると思われる。四〇年代に入って在内地人作家が多く登場したのは、一つには日本統治期間が四十年を越えるまでに至って、台湾に定住する内地人が増えてきたことが原因として考えられている。台湾は、「内地で行き詰まった人間たちの流れ着くところ」というイメージを長らく引きずっていたが、その中でも徐々に台湾に生活基盤を置く内地人移民も増え、四〇年代はいわゆる「在台二世」の登場が予想される時期であった。「流れてきた」のではなく、より台湾に根ざした存在の内地人青年層が台湾に生まれつつあり、その層から、在内地人作家が生まれた、と考えられるのである。

一方、在内地人作家の供給源はそのような「在台二世」層の他に、日本統治の長期化の中で台湾に徐々に増加していった「学校」の存在があつた。台湾では特に一九二〇年代以降、中等教育以上の教育機関が増えていき、一九二八年の台北帝国大学の設置⁽¹⁾によって、初等教育から高等教育までの教育機関の完備を達成するのだが、そのような学校の教員たちが在内地人作家の供給源になつたのである。これは教育機関の完備によって、教育官僚でもある官立学校教員たちの異動循環の中に、台湾が組み込まれたことを意味しているのだが、ともかくそれに

よって台湾に多くの教育エリートが教員として一定期間定住するようになり、その彼らが台湾文壇に登場していくようになったのだ。

その中で、新垣宏一は基本的には前者、つまり「在台二世」の作家である。新垣は台湾南部の高雄で生まれ、高雄中学、台北高校を経て台北帝国大学国文科に入学と、完備された台湾の教育機関をきれいなぞつた、これはこれで珍しい人物であつた。

そして、大学卒業後に台南の台南州立第二高等女学校に教員として赴任した。この点では、新垣は後者の供給源にも関わっているのだが、このように、一貫して台湾に暮らし続け、台湾から離れずにいた新垣だから、三〇年代から四〇年代にかけての文学活動に連続した参加が可能であつたのではないかと考えられる。もちろんその過程で、新垣は他の在内地人作家と比べて多くの本島人たちとの接触・交流をもっていたはずで、その点も、教員としての異動過程で台湾へやってきた者や、台北市の内地人社会の外部にあまり出ようとしなかつた者との間に差異を生んだであろう。

このような新垣宏一の位置は、先に挙げた西川満と比較する時、非常に興味深いものになる。

西川満は会津若松の生まれだが、満二才の時、両親に連れられて台湾に渡ってきた。台北一中を卒業した後台北高校受験に失敗して早稲田第二高等学院に入学、早稲田大学仏文科を出て帰台した。台湾では台湾日日新報社の学芸欄記者となり、その仕事と自費出版と同人誌運営を中心とする文学活動を両立させ

ながら、四〇年創刊の『文芸台湾』では編集発行人・経営者となった。

西川はほぼ「在台二世」といえる存在だが、しかし厳密にはそうではない。学歴も、中途で日本内地に移り、しかし台湾に戻ってきている。帰台後は新聞記者であつて、教員にはなつていない。生活圏は台北で、台北以外の地域には殆ど出ていない。

新垣と西川は、生活基盤としての「台湾」の重要度は近いものがあるが、経歴や社会的位置・経験の面ではかなりの違いが生じている。生活圏も、新垣が台湾南部、西川が台北であり、この両者の差異は、「同じ台湾」という枠組みではとても捉えきれないのである。

新垣自身も、戦後の回想の中で、西川に感じたコンプレックスを初めとして、作家としての西川満の存在を強く意識していたこと口にして⁽¹³⁾いる。ここで、おそらく新垣は自らが描く「台湾」を、西川が描くそれと差異化することを目指し、それによつて、自らがより深く「台湾」にコミットしていることを示そうと試みたのではないか。

そのような表現行動の発露を、今回新垣宏一の「砂塵」というテキストから見てみたいと思う。

「砂塵」というテキスト

新垣宏一のテキストの多くは、台湾南部、特に台南の街を舞台にしているものが多い⁽¹⁴⁾。これは、一つには台湾南部に生まれ育つた新垣自身の経歴の影響と、その南部が台湾の中で最も古い歴史を持つ地域であるという歴史的背景が考えられるが、も

う一つ、やはり、台北中心の活動を続ける他の作家たちとの差異化を意識してもいたであろう。この場合、その中心的存在はやはり西川であるが、西川に限らず、在内地人作家も本島人作家も、多くは台北で活動していたから、それに対して独自の視点を提供することも意図していたのではないだろうか。

そのような新垣のテキストの中で、「砂塵」もまた、台湾南部・台南の街を舞台にしたテキストである。

「砂塵」は一九四四年一月の『文芸台湾』終刊号に掲載された⁽¹⁵⁾。物語内容は、以下の通りである。

野沢は、台南の本島人生徒が中心のある女学校教員をしていた。ある日、クラスでも優秀だが陰気な存在であった陳氏宝玉という生徒が野沢の自宅に相談にやってくる。聞くと、宝玉は親の借金のかたに身売りされることになったので、学校を止めたいという。野沢は驚いて宝玉の両親に会いに行く。富裕な家庭の子どもが多い女学校で、宝玉は例外的に貧しい家庭の子どもで、父親が家業をなげうつて競馬にはまり、借金を作ってしまったという。野沢は、日本統治以前の売買婚風習が強かった頃ならともかく、日本統治期になってこのような身売りが起こるといふことに愕然とするが、なんとかそれを阻止しようとする。そこで、宝玉には台湾で今度完全実施される初等教育の義務教育化を受けて、宝玉を公学校⁽¹⁶⁾の教員に推薦することにし、それで借金を返すように勧める。そして、このような無法な身売りをなんとか阻止すべく警察署に相談しにいこう、と宝玉の家を出て歩いてゆくとこで終わる。

新垣宏一の台湾南部、特に台南の街へのこだわりは非常に強い。そして同時に、日本の敗戦にともなう日本統治の終了によって日本へ引き揚げるまでの間勧め続けた女学校教員としての経験も、多くのテキストに色濃く反映している。「砂塵」は新垣のこの二つの傾向が同時に現れているテキストであり、また、『文芸台湾』が終刊を迎えたという、時局的にもかなり切迫してきた時期のものとして、「在内地人」という立場からの台湾への対峙が特徴的に描かれているテキストともいえる。そのような点から、在内地人作家としての新垣宏一のテキストの中で、最初に取り上げるものとして選ぶことにしたい。

植民地の教員と女生徒

日本帝国の女子教育において、高等女学校が担った中等教育は、女性にも「近代教育」の価値観を伝える一方で、その価値観と矛盾する「良妻賢母」主義という価値観へと導こうという矛盾をはらんだものであったが、それが植民地である台湾で行われるとき、果たしてどのような環境を創り出したのだろうか。

「砂塵」冒頭で語られているように、台湾での女子教育は内地人と本島人との分離教育で始まった。内地人女子のための中等教育期間としては、一九〇七年に台湾総督府中学校付属の高等女学校が台北に設置されたが、これは内地から台湾への移住者が増え、彼らが連れてきた子どもたちのための中等教育機関を求める声に答えた結果であった。故に、それらは当然内地人学校で

あって、本島人の子どもには開放されなかった。一八九五年の領台以降、女子教育は国語伝習所¹⁷か公学校、或いは国語学校¹⁸第三付属学校に限られていた。

それが、一九一九年の第一次台湾教育令によって、内地人の高等女学校に対し修了年限が二年短い本島人向けの女子高等普通学校が設置される。さらに、二二年の第二次台湾教育令の段階で、女子高等普通学校が高等女学校に改組され、その上で中等教育以上の学校に於ける内台生徒の共学が建前上整備されたのである。

ただし、共学制の実施といっても実際はそれ以前の分離教育の「伝統」は引きずられており、それぞれの学校には本島人生徒に不利な形で暗黙裏に内地人枠・本島人枠が設置されていた。台南でいえば、本島人生徒が多数を占めていたのは、新垣が大学卒業後に赴任した台南州立第二高等女学校である。故に、「政策的に起つた現象ではない」という「砂塵」の語りは実情を正しく伝えているとは言えない。確かに明文化された政策ではないにしても、「暗黙の了解」として内地人中心の学校と本島人中心の学校では、それぞれの出自別定員が決められていたのである。¹⁹

このように、「近代教育」と「良妻賢母」主義の両立という矛盾を抱えるだけでなく、共学制の背後の差別構造をはらんでいた台湾の女子中等教育であったが、しかし、一方でその女学校を経験した本島人女子は大抵の場合、「高女に通つた」という事実²⁰に強い誇りを抱いていた。山本礼子や洪郁如によれば、差別や矛盾を解消しないままの学校であったにせよ、従来「家」の

中からほとんど一歩も外に出ないままの生活をしていた台湾の中流以上の女性にとって、学校に通うということ自体が「解放」の契機となったのであり、さらに日本統治期を通じて、台湾の女性の近代的な意識向上を促すことになったことが指摘されている。²⁰⁾

しかし、ここで「中流以上の女性」という条件がつくことを忘れてはならない。台湾の本島人女性への中等教育は、中上流の本島人家庭の子女への教育が強く意識されたものであった。つまり、本島人内部での、階層化が計られていたのである。

その点に関して、洪郁如は次のように言う。

植民地女子教育は、概して旧支配層の台湾人女性を対象として想定される側面が強かったといえる。(中略)支配層は、総督府が社会に働きかける際の直接的な対象でもあり、現地社会に多大な影響力を持つ有力者でもあったため、植民地経営に関わる重要な社会階層として認識された。(中略)彼らは同時に解纏足運動の主体となった階層もあった。そのため、容易に接触できない支配層の台湾人女性を、学校システムを利用して家庭から引き出すこと自体は、植民地主義論者においても否定するところではなかった。

高女生たちは、将来的には新世代(日本語教育世代)論者の台湾人エリート層の妻の座を約束された集団であったといってもよい。

……男子のようにアカデミックな指向性の強い教科が中心となるより、高女教育においては「中上流婦人」に相応しい教養・趣味の養成を重視する傾向があった。

女学生は一般的には高等女学校の全体の雰囲気非常に楽しいものとして受けとめていた。(中略)淑女の世界に入ったようだとその回想もあるほど、満たされた女学校生活を謳歌する者が多かった……²¹⁾

このように、女学校は、統治側に仕組まれた形で、台湾における「女性解放」(それは、後に母親として家庭に入る本島人女子生徒に対して、家庭を内側から日本に同化させることを期待してのものであったのだが)を担っていた側面があるが、それらは中上流家庭の女子という、ごく限定された階層出身者が対象であるという限界が最初から明白であった。高等女学校は、旧エリート層出身者の新エリート層への移動装置としての機能が第一のものであったわけである。それは、女子生徒達が男性新エリート層の妻候補であったという事実が示している。

「砂塵」の中でも、「又彼女達のやうに女学校の娘を出してゐる家は大い裕福な」といふよりはむしろ富豪の娘であると言われている。野沢たち教師の目から見ても、台湾の高等女学校が階層限定化された学校であることへの認識があったのである。

このような状況が台湾にあったことを踏まえて、野沢の教室内部での振る舞いについて考えてみたい。

野沢は自分の勤める学校が「本島人主体」で「特殊である」ことを理解している。そしてその上で、テキスト冒頭から始まるような「雑談」を行っている。

野沢はここで、「佐藤春夫について話」している。新垣が「台湾を描いた作家」としての佐藤春夫に強い興味と関心を抱いていたことは確かであり、これはそのような新垣の「反映」だといえるだろう。

野沢は、その佐藤春夫の話を、「略伝と作風」「大正九年の訪台」そして「女誠扇綺譚」の三段にわけて話しているのだが、「略伝と作風」は「ロマンチック」に、「歯のうくやう」に話し、「大正九年の訪台」は野沢が生徒らを引率した日月潭への修学旅行の見聞を交えつつ話している。この時、野沢は佐藤春夫の「日月潭に遊ぶの記」について語ったのであろうが、同じく佐藤春夫の手になる「霧社」や「殖民地の旅」については語り得たのだろうか。

そもそも、佐藤春夫の台湾関連のテキストの多くは、戦時下植民地の学校教員として「皇民化」を推し進めなければいけない野沢の立場からすれば、生徒達に語るには不適であることはいうまでもないことである。にもかかわらず、野沢が佐藤春夫について女生徒の前で語ることが出来たとすれば、その「語り」は、佐藤春夫のテキストに対して相当に「改変」を行った上でものと考えざるを得なくなる。

そのような状況が予測できる中で、野沢は「女誠扇綺譚」をどのように語ったのだろうか。

「台南の街を舞台にしてゐるから、同じ街に住む者にとつては

大いに興味を感じるわけで」と、野沢は「女誠扇綺譚」の筋を生徒に聞かせているが、ここで語り手ははっきりと野沢が「女誠扇綺譚」の筋を恣意的に改変していることを認めている。野沢は「生徒に話すのに具合の悪い点などはたくみに夢のやうにぼかしながら話し続け」ているからである。

この「具合の悪い部分」というのが一体「女誠扇綺譚」のどの部分なのか、それはテキストからは判断不能であるが、それは「安っぽいロマンチズム」のような話になっているらしい。そしてそれを、「生徒の方では十分に『女誠扇綺譚』は美しい作」と受取って行く」ようにし向けている。このとき、語り手は「女誠扇綺譚」を「可憐な本島人女性をヒロインにとり上げた物語」といつているが、「女誠扇綺譚」に出てくる「女性の声」および「本島人の下婢」は、「ヒロイン」と呼ばれるような位置づけではないのだ。

ここで、語り手は、野沢がこのように「女誠扇綺譚」を「美しい作」にして生徒達に語り聞かせる理由として、この女学校が本島人生徒中心という「特質」があることを述べ、同時に台湾島内の中学校・高等女学校が、内地人生徒中心校と本島人生徒中心校とに別れている状況について解説している。

ここで語り手は、野沢の勤める学校が、そのような本島人生徒中心校であるが故に「国語教育とか皇民錬成とかいふことにその重点を置いて力が注がれてゐるのである」と述べているのだが、「国語教育とか皇民錬成」に重点を置くことが必要な「特質」を持つ女学校では、「女誠扇綺譚」を「美しい作」にして語る必要がある、というのは、文脈的な整合性を欠いた説明では

ないだろうか。何故、本島人生徒中心校では、「女誠扇綺譚」を「美しい作」にしなければならぬのか。

つまり、ここで語り手は、野沢の「語り」の改変手口をはからずも露呈させてしまっているのである。語り手は野沢の行った「改変」を、「女誠扇綺譚」の「美しい作」化することを中心にして述べているが、「改変」の中で重要だったのは、「美しい作」化することではなく、やはり生徒達の民族意識を刺激するような箇所を削除することだったのだ。だからこそ、本島人生徒中心という学校の「特質」を踏まえることが重要で、そしてそのために読者に向かつてその「特質」を長々と解説したのである。

さらに、野沢は自分の生徒達が「大ていが裕福な」といふよりはむしろ富豪の家」出身であるから、「女誠扇綺譚」を面白く感じる条件が備わっている、と述べている。が、「女誠扇綺譚」の中で描かれている「娘」像は、伝説として語られる中に現れた、横暴な先祖の作った財と家族を一瞬に失い狂死した女と、養父の独断で決められた婚姻から逃れるために自殺した娘である。「富豪」に対する負のイメージしか伝えないこの設定から、当の「富豪の家」出身者である生徒達が、どのような「面白さ」を感じると考えているのだろうか。

野沢はこの「雑談」を「成功した」ととらえているが、それははなはだ怪しい。ここで野沢が「成功」した部分があるとするならば、自分の職業上の禁忌に触れずに佐藤春夫のテキストを生徒達に語ることが出来た、という点くらいであろう。また同時に、このような話を「面白く感ずる」と野沢が安易に考え

るのは、それだけ野沢が、本島人生徒達の、「本島人である」ということに対する配慮を欠いた人物であるということの証明でもある。野沢は本島人生徒達の「特質」に気をつかっているつもりであるが、実は全然気などつかえていないのだ。

野沢は、このような「雑談」で生徒達に「卒業後に望む」という内容を語ることが多いが、しかし本島人生徒中心校であるが故に、自分は「月並なことは言つてゐられない」立場にある、といっている。しかし実際に野沢が語った話は、佐藤春夫のテキストから民族意識を刺激させるような部分を適当に抜き取った自分本位の改作に過ぎなかった。野沢は職務上の必要のために、生徒達に「皇民化」へ向かう話をしなければならぬ立場にあるといっているのだが、結局、彼はそのあたりの要求についてはひどくいいかげんな態度で臨んでいるのである。野沢は生徒達に、「雑談」内容についての反応を全く確認していない。全て自分の中で「満足しているに違いない」と思いこんでいるに過ぎない。故に、彼の「雑談」中に「うかぬ顔」をしている宝玉を見て不愉快になるのである。

野沢は善良でおとなしそうな教員として描かれているが、その一方で、非常に独善的な姿勢で生徒に向かつている部分が、この「雑談」の中から伝えられてしまうのである。

異分子としての宝玉

こういう状況下で、宝玉は一体どのような立場にあつたといえるだろう。

殆どろくな稼ぎのない家庭から、学力だけで高等女学校に進

学した宝玉は、日本の学校制度史的にいえばまさに「苦学生」の典型といえるが、しかし、その入学先の実態が「中上流婦人」養成機関であったとき、宝玉はどのような思いに駆られたであろうか。

「筋書通り受持の先生が惜しがつて女学校へ入れるやうに親を説きつけた」結果女学校へやって来た宝玉を、野沢はもてあましてゐる。日本内地でも学校制度開始初期の頃には、このように小学校の教師などが児童の学力を惜しんで、学歴の価値を未だ受け入れていない親を説得させ、それらの児童を進学させたという話は多いが、野沢の態度は、むしろそれに対し批判的でさえある。

野沢が宝玉をもてあましてゐる様子は、その宝玉の観察にも現れている。野沢は宝玉を「性質はどちらかといへば陰気」「顔だちも余り良くなく」「一重瞼の眼が力無く人を見つめ」「無口な事が多かつたため、友達らしいものもゐないやうであつた」と評する。さらに、「雑談」の最中に「うかぬ顔」をしている宝玉を見てると自己嫌悪を感じるので、「宝玉の態度を見ないふりですすす」のである。

これだけでも教員としてあまりな態度であるのだが、ここで、先の台湾における高等女学校環境を思い出せば、野沢の宝玉に対する評価は、宝玉が「中上流婦人」養成機関の中の自分の立場にどれだけ苦しんでいるかどうか、ということへの配慮・想像が完全に欠落した手前勝手なものであるといえるだろう。宝玉が「陰気」で「無口」で「友達」もいないことが、野沢の評価ではあたかも宝玉自身の個人的な欠点に還元されてしまふ

が、女学校という特殊な環境下に放置されていることを考えれば、それらが同級生たちとの階層の絶望的なギャップがもたらした孤立なのではないか、という心配を抱いてもよいはずなのだ。

総督府が高等女学校の生徒を対象を中上流家庭に絞つた背景に、本島人側から下流以下の家庭の子女と同じ学校に通わせたくない、という要求があつたことも考えれば、宝玉が女学校内で闊達でいられると考えるのは難しい。そして、そのような宝玉が、野沢が予想した形で「女誠扇綺譚」に関心・興味を持つことなど最もあり得ないことである。野沢が宝玉に半ば理不尽なマイナス評価を与えるのは、宝玉の存在が、野沢の「善良な教員」の仮面を手をかけ、彼の教室内における独善性を暴くやうに作用していたからだろう。野沢は、自身が宝玉の女学校内での位置に配慮を欠いていながら、生徒である宝玉に、自身の立場への配慮を求めているのだ。

野沢は宝玉の身売り騒ぎに際して、自身の無力さに対し、「こんな子供にとつて、女学校教育がどれだけの効果を持つものであらうかと疑う気持が起り、「公学校の受持教師の一時の感傷の心さへなければかうした道には足を踏まずにすんだかも知れない」と思う。これがおそらく野沢の本音なのだろう。皇民錬成が今日的な教育の主眼である、ということを繰り返す野沢だが、そのような彼が、宝玉のような貧しい本島人家庭出身者への教育の必要を疑い、しかも宝玉が身売りの危機に瀕している原因が、女学校に進学したことにあるかのように述べるに至つては、かなり強引な責任転嫁である。野沢はこのような「本

音」を「教師達も抱いてゐる抱負」、つまり皇民鍊成という目標でねじ伏せるのだが、身売り騒ぎは「教育の責任」ではなく、無知な宝玉の両親が原因であると断じるあたり、そのメッキはもろい。そしてまた、「皇民鍊成」をメッキとして利用とする野沢の姿勢は、彼が本心から生徒に対して皇民鍊成を達成させようと考えているわけではないことを明らかにしている。

野沢が台湾の女学校というシステムに従い、その内部の異分子である宝玉を「面倒」と感じている様子は、この内地人教師の一面的な世界観を暴き出している。それは、女学校経験者達が現在まで、女学校経験を誇りに感じる一方で、例外なく経験し忘れられずに来ている内地人教師からうけた差別や蔑視²³が、温厚を装っている野沢の中にも伏流していることを示している。野沢は女学校内部で多層化している支配・被支配の権力構造を前提として行動している教師にすぎないのである。

「読者」は誰か

次の問題は、この「砂塵」が一体誰を読者に想定して描かれたものか、という点である。

台湾内部の雑誌である『文芸台湾』掲載である以上、第一に考えられるのは当然台湾の日本語理解者である。そしてこの人々はさらに限定して想定することが出来る。『文芸台湾』そして競合誌である『台湾文学』は共に同人誌的性格の強い雑誌で、同人外での購読者は絞られ、単に日本語理解者であるというだけでは読者対象にはならない。大衆文芸ではなく、台湾におけるハイ・カルチャーの創出を意図していたであろう両誌の購買

層が日本語エリート層に偏っていたことは想像に難くない。

ここで両誌の差異を比べて明らかにするのは、『台湾文学』がその性格上台湾内部向きを標榜する（実際に台湾の外への意識がなかったかどうかは検討の余地がある）のに対し、『文芸台湾』の中央志向は明瞭であったことである。『文芸台湾』の主催者である西川満は雑誌を毎回内地の著名人や作家に送っており、その礼状（半ば私信的なもので）をそのまま『文芸台湾』誌上に内地からの反応として掲載したりしていた。

このような西川の「中央志向」は、同時代には『台湾文学』側から、そして現在までも『台湾文学』に高い評価を与える研究者を中心に批判され続けているのだが、この「中央志向」の内実の検討は殆どされていない。

「日本人」が「日本語」で文学活動をする上で、中央文壇で認められることを目標とすることが批判されてしまうのは何故か、と考える。これが日本内地の地方同人誌の一派の目標だったとしたら、誰が彼らを批判したのだろうか。

ここでは、だから「台湾」という場所を「特殊化」した意識が働いていることになる。台湾の文学活動は、台湾内部で自己完結しているべきだ、という主張が正統となる中で、「中央志向」は否定材料となるのだ。

西川や『文芸台湾』派の傾向として、台湾の南国性・異国性を「売り」にしていたという面がある。このような側面が、やはり台湾を食い物にしている、台湾を踏み台にしようとしている、という感情を、内地人には感じることが出来ない深さで「台湾」という場所に根ざしている本島人作家などに抱かせたのは

不思議なことではない。しかし、そのような創作傾向の一方で、西川らが「台湾文壇」形成に相当な努力を払っていたことも事実なのである。特に西川は、『赤嵌記』等を東京から出版した経緯²⁶もあるだけに、自分が中央で認められるとき、それは「台湾の西川満」としてである、ということは十分に分かっていただろう。つまり、西川は「中央志向」の強烈な作家ではあったが、それだけではなく、同様に強烈な「台湾作家」意識も持っていたのである。そして、特に「文芸台湾」で活動していた在台内地人作家たちには、このような「中央志向」と「台湾作家」意識の同居という傾向が程度の差はあれ存在していたのではないだろうか。

「砂塵」が求めている読者を考えると、この「傾向」の反映が見られるように感じる。

テキスト冒頭でなされる台湾の女学校の内台分離状況の解説、本島人女生徒が学校で習った日本式の礼儀作法をなかなか実践できない様子、東門町付近の典型的な「台湾の風景」の描写、台湾の国語普及の現状、台湾の人身売買まがいの養子制度の解説、台湾にも施行されることになった義務教育について：などの言説は、台湾内部の日本語人へ向けたものとは考えにくい。台湾に暮らしている者にとっては当然の知識・くどいくらいの解説は、台湾を知らない者へ向けた言説と考えるべきであろう。ここで、「砂塵」というテキストに「中央志向」の側面が現れている。

また、佐藤春夫とそのテキストをことさらに「ロマンチック」という方向に誘導しようとする語りは、「女誠扇綺譚」Ⅱ「エキ

ゾチシズムのテキスト」という島田謹二の提示した公式²⁷を踏まえてのものである。さらに、「女誠扇綺譚」の下婢が、拾われた孤児とされている設定について、「この小説のやうに孤児であったものが拾はれたのは特別な境遇で、大い小さい時に金で買はれたものが多い」と語って、その証左となるような石碑や証文について詳細に語る下りは、「中央志向」の側面を持つと同時に、佐藤春夫の台湾描写の「いいかげんさ」を遠回しに指摘したものであるだろう。この当時の新垣は、すでに「女誠扇綺譚」に対して批判的スタンスに転じていたからだ²⁸。

しかし、「中央」をかなり意識したテキストとはいえ、その姿勢が徹底されているとは言えない。例えば、テキスト内では当然のように「公学校」や「志願兵制度」「芸姐」といった殖民地台湾特有の用語を特に説明もなく用いているし、「安平」「斗六」という地名も唐突に示している箇所がある。

このようなテキストの「描かれ方」に、在内地人作家の迷いと表現上の限界が存在している。「砂塵」は中央文壇を意識しつつも、それを徹底できていないのである。

在内地人作家である新垣は、自身が内地人であるが故に、内地の内地人と自身との間の齟齬に気がつきにくかったのではないだろうか。西川のように、積極的に内地に自身を売り込んでいた作家と違って、新垣の活動は台湾に限定されたものであったし、彼には旅行をのぞいて一切内地経験がなかった。新垣には、台湾から完全に切り離された形の内地人読者像を想像するのは困難な事であったはずで、そのとき、彼のテキストが「中央志向」を反映していたとしても、想定すべき「内地人読

者」の像を正しく結ぶことが出来なかつたのである。

「砂塵」における想定される読者像の不明明さは、このような在台北世作家の迷いと境界の結果である。

「女誠扇綺譚」についての二つの語り

宝玉が身売りされるという事態に直面したとき、野沢は女生徒たちへの「語り」とは違ったレベルで「女誠扇綺譚」を想起する。それは下婢の位置付けについてである。野沢は清朝の頃には子女の売買や借金の担保化などがあつたが、日本統治下の台湾でそのようなことはあり得ないとしつつ、現実に関自分がそのありえない事態に直面したとき、宝玉の身の上を「無知純情」な下婢の悲劇と重ね合わせようとする。この「無知純情」という評価は宝玉の両親に対しても適用されており、ここでの「女誠扇綺譚」はそのような「台湾」の「遅れている側面」を強調する言説に限定されて利用されている。女生徒達への「語り」が「美しい作」にされているのに対して、ここで野沢が想起するのは、「隣人に拾はれて養育され」、本人の意志にかかわらず内地人と結婚させられることになつた下婢の言説という、台湾への負の現実のイメージに結びつけられたものになつていくのである。

このような、「女誠扇綺譚」の「語り」を区別して行うという在り方は、野沢の無邪気な傲慢さの表れであるといえる。彼は生徒にはお手軽な幻想を与えることに終始し、その幻想の背後にある負の側面を伝える労を厭うている。しかし、自分の内的な矛盾にぶつかるとき、その負の側面を都合良く利用する。そ

れは内地人が本島人に、教師が生徒に強要する上下関係の延長線上の事態である。

そもそも、「女誠扇綺譚」において下婢についての箇所というのは、枝葉の部分である。そして、その中で中心的な内容は、その下婢が「廃屋の声」の主であつたということ、そして主人の命令にしたがつて内地人と結婚させられそうになり、それを拒否して自殺した、という点であつて、野沢が問題にしているような台湾の伝統的な人身売買的な養子制度は全く争点になつていないのである（というより、「砂塵」冒頭で指摘されているように、佐藤春夫は台湾の「人身売買的な養子制度」を把握出来ていないはずなのだから）。故に、ここで野沢が「女誠扇綺譚」を引用しているというのは、「砂塵」の中での「女誠扇綺譚」に対する把握とかみ合っていないことになる。

つまり、教室内での語りとは違ったレベルでの「女誠扇綺譚」引用ではあるが、しかしそれが「野沢の改変」を前提としたものである、ということは共通しているのである。野沢は恣意の上恣意を重ねた「女誠扇綺譚」像を自らの中に抱いていて、それを都合良く、いい加減に利用しているにすぎないのだ。

野沢と「語り手」

最後に、「砂塵」の「語り手」と野沢の位置付けについて考えたい。

「砂塵」の「語り」は、例えば野沢自身の「女誠扇綺譚」理解をそのままの文が語っているところなどのように、野沢自身の主観をそのまま述べ続けることで構成され、「語り手」と野沢

自身が重なってくる場面があり、それ以外の部分でも、基本的に野沢自身の語りを代行している。しかし一方で、「語り手」と野沢が乖離する箇所がある。

前述した、野沢が自身の「雑談」に対する宝玉の反応に不快感を覚えたことを語る場面はその一つである。野沢はこの前後で、一方的に宝玉を評価・断定しているわけだが、そのような野沢は「若い気負った勢で喋るくせに、気の小さいところがあるので、かういふ顔にで出会ふと、ギョツとして、ふと我に帰つた気持になり、しまひには、むらむらと何とも云へぬ自己嫌悪に似た感情に充たされることがあつたと語られる。このとき、「語り手」は野沢に対して一定の距離をとっている。野沢が恐れた宝玉の無反応は、実は彼自身が生徒の状況に注意を払っていないこと、生徒ときちんと向き合っていないことが原因であることを、この距離感が示しているのである。

そして、この乖離の顕著な部分が、最後の場面で、野沢が宝玉を卒業後に国民学校の教員に推薦しようと考え、その点に、それまで無意味だと思っていた宝玉に対する女学校教育の意義を発見して喜んでいる、「考えてゐる内に野沢は自己満足に似た明るいものを感じはじめた」という部分である。

実際のところ、この時点では事態は全く好転していないし、解決されてもいない。全て野沢が勝手に考え、勝手に請け負ひ、勝手にうまくいくだろうと思ひこんでいるだけである。敢えて解決の糸口に達した部分を探すとすれば、綉梅が彼女の妹から借りた三十円ほどの借金を野沢が肩代わりしてもいい、と考えられている事くらいである。それ以外は、野沢には権力側（校長や

警察当局）に頼む事が出来るだけで、実際に野沢の希望通りに事が進む保証など全然ないのだ。

にもかかわらず、野沢は自分の考えに「自己満足に似たあかるいもの」を感じてしまう。これは、やはり野沢が在内地人であるが故の傲慢さの発露であろう。彼は自分の考えが正しいと思う限り、そしてそれが無知な本島人社会に対しての行動であると理解する限り、自身の優位を疑わないのである。

このような野沢の心理を「自己満足」と描く「語り手」が、野沢と重なることはあり得ない。ここは、野沢と「語り手」とが最も離れた場面であると言つていいだろう。「砂塵」の「語り手」は野沢に寄り添い、場合によっては重なってくるわけだが、この最後の場面に至つて何とか一線を引くのである。

おわりに

「砂塵」は皇民化政策の推進期に発表されたテクストだけに、その内部に「皇民化」という言葉がやたらと踊っている。しかし、これらの言葉は実際にはまったく機能しない、空転した言葉となつている。それは、語り手≠野沢自身が、野沢の勤める学校を「国語教育とか皇民錬成とかいふことにその重点を置いて力を注がれてゐる」と言つておきながら、「皇民錬成」の場である女学校に参加してきた宝玉を厄介者のように見る点や、宝玉が野沢の家に訪れた時、畳を前にして物怖じする描写の中で「日頃の生活にはその必要がない」礼儀作法を学校がいちいち教えているばかりしさを示してしまつている場面や、宝玉の一家を「無知な階級」と断じていながらその彼らに理解できるわ

けもない「日本人精神」や「日本人の女として」の生き方を要求している部分などから明らかになっている。

冒頭の、実質的な内台分離教育が行われている実態を描いている部分といい、このテキストは、表面的には「皇民化」という予定調和を目指して描かれているものの、あちこちでそのずさんさやいかげんさを野沢自身のいかげんさを通して暴露しているのである。

最終場面で、宝玉に国民学校の教員職を紹介するのも、あまりにも唐突で不自然である。教員職に推薦する用意があるはずの生徒に対して、なぜ語り手¹野沢は冒頭から否定的な評価を与え続けたのか。宝玉は野沢に学校を止める旨を伝えるに来た場面で、「私学校を出しても何もならないんですから」と半ば絶望気味に告白している。野沢が宝玉を教員に推すつもりがあり、そして生徒のことを心配する心を持っている人間ならば、この時に教員職があることを伝えてやるのが本当ではないのか。それをしなかったというのは、つまりこのテキストが、後半になってまさに「皇民化」という「予定調和」に帰結しようとしたことの証拠にもなるだろう。

このような状態から、「砂塵」を「結果的に皇民化教育の皮相さを暴いたテキスト」と評価することも出来るかもしれない。しかし、そのような評価もまた、「皮相」なものに過ぎない。「砂塵」の中の、野沢に寄り添う形の語り²の在り方は、野沢に自身³の在り方について反省も批判もさせてはいないからだ。彼は善良な人間として語られているが、同時に在内地人としての、特に本島人に対する「無神経さ」を顕わにしている、そし

て野沢も語り手自身も、自身がそのような「無神経さ」を露呈してしまっていることに気づいていない。その時点で、このテキストは非常に中途半端であり、未熟なのである。ここでは、例えば西川満が「赤嵌記」でみせたような、台湾性を強引にねじ伏せ、日本性を過剰に示したときに見せたような言説⁽²⁹⁾はない。「赤嵌記」の内容の是非はともかく、そのテキストが強い一貫性を示しながら物語を作り上げていくのに比べて、「砂塵」はその物語構造の上で、想定読者の問題にしても、語り手の問題にしても、テーマの取り扱い方にしても、全てが中途半端なのである。

野沢は「女誠扇綺譚」をロマンチックなものであり、台湾の事情把握についてはいまいちだという指摘をし、自身の台湾に関する知識を披露することで「日本の内地人」に対して、「外地の内地人」としての視点の在り方を示している。同時に、そのような野沢を表現しているこのテキストは、「台北の内地人」に対して、作者・新垣宏一がより台湾に密着・同化した「台湾の内地人」であることをアピールして見せている。一方で、テキスト内部の野沢は「台湾の本島人」に対しては「皇民化」を唱えつつ、いやだからこそ、彼らは「異民族」である、という姿勢を崩さないのだが、それに自身は気づいていない。そして、野沢にそのことを気づかせることに出来ない語り手と、テキスト外部の作者・新垣宏一も、「自身がいかに台湾に深くコミット出来ているか」を読者に対して誇示すること、「本島人に対する皇民錬成」という予定調和にテキストを持ち込むことの矛盾に気づいていないのである。つまり、野沢、語り手、そして語

らせている作者・新垣宏一は、自身に気づいていない形で、決定的に台湾を客体としているのだ。

新垣宏一は高雄中学・台北高校・台北帝大・殖民地教育官僚というルートを経た、典型的な殖民地知的エリートであった。おそらく彼は知性によって台湾を理解しようとし、それが「女誠扇綺譚」調査や、「砂塵」に散見されるような台湾の民俗に関する知識となって現れている。しかし、このような「理解」の方法は、結局は「他者」に対して向けられるものにはかならない。故に、「砂塵」で語られる「皇民鍊成」という言葉は、対象とされている本島人にとってはもちろんのこと、それを実行するよう描かれている野沢、それを語る語り手、語らせている作者・新垣宏一にとっても、「他人事」のようにしか描かれないのである。

「砂塵」がこのような構造を持ってしまおうというのは、作者・新垣宏一の望むところでは無かったであろう。彼の意図は、そのテキストに表された「台湾」関連の描写から判断する限り、「いかに自身が「台湾」を理解しているか」「いかに他の作家たちよりも「台湾」に関する知識を備えているか」ということを知らしめるところにあった、と考えられる。

もちろん、その意図は読者に伝わっていくに違いない。しかし、自分自身が、「在台内地人」という、「日本統治期台湾」という時空において、生得的に「権威・権力・支配」の表象（あるいは実権）を持ち、それを「台湾」に対して行使する立場にある、ということに気づけない時、そのような描写は個人的な意図を越え、政治的民族的な差別構造をはらむことになる。そ

してその上に「皇民鍊成」を描き込むという「戦時下」状況へのすりあわせを行った時、テキストは決定的に独善性を帯びるようになるのである。

新垣が描いた「野沢」という男は、確かに善良な男であった。しかし、「善良である」ことをいいわけに、「台湾」内部の支配・被支配構造に向き合おうとはしなかった。「向き合うこと」は不可能だったのでないか、時空的な表現の制約があったのではないか、というレベルにこの問題を引き込むことは容易い。だが、このテキストが実際のところ「皇民鍊成」という時空的な要請を、表面を飾るだけで上滑りさせていることを考えれば、「向き合う」姿を描くことが不可能だったとしても、「向き合えない」ことを表現することもまた出来たのではないだろうか。

「砂塵」はその意味で逃げている。野沢が最後の場面で、警察官の知己や校長という支配権力を保持する存在に依存することを自らの解決策のように捉えて「自己満足」を覚えるように、このテキストは「皇民鍊成」を描くこと」という権力の要請には逆らえない、という言い訳に逃げ込み、その枠組みの中で「台湾」への理解をちりばめるところで「自己満足」してしまっているのである。

注

(1) 本稿では、日本統治期台湾に定住していた日本内地出身者を内地人、台湾出身者を本島人と表記した。これは、当時は内地人・本島人共に「日本人」とされていたこと、現在用いられている「台湾人」という概念は一九四五年以降の台湾が経験した歴史の中で、少なくとも変容して、安易に当時の台湾出身者に当てはめることがた

められることを根本的な理由とし、「内地人」「本島人」と表記することによって、当時の台湾における問題系をはっきりさせることができると考えているからである。

(2) 和泉司「日本統治期台湾文壇における『女誠屈綺譚』受容の行方」

〔藝文研究〕第八十三号 二〇〇二・一一一 参照。

(3) 日本統治期台湾の文学への言及は、尾崎秀樹の諸研究〔近代文学の傷痕〕一九六三・二二）などがあつたが、あくまで例外的な位置づけであつて、現在のように、植民地文学の存在が日本近代文学という領域全体の視野に入るのが定着したのはごく最近のことであらう。

(4) 「彼」から「在内地人」というファクターをも取り去つて検討する、という段階には、論者は至っていない。当時の台湾には「目に見える形」での内地人と本島人の差別化が公然と図られており、それから無関係な文学活動はありえないからである。

(5) 西川満（一九〇八—一九九九）は、会津若松に生まれ、満二才で両親と共に渡台。彼の親族が台湾で炭坑を経営しており、西川は台湾の資産家層に属していた。少年時代から文学趣味を持っていて、台北一中を経て早稲田大学仏文科に進み、台湾へ戻ると、さらに台湾での文学活動に励むようになる。一九四〇年、台湾文芸家協会発行の『文芸台湾』の編集発行人となつて存在感を發揮。その後、発行人が文芸台湾社に移ると、名実共に『文芸台湾』のオーナーとなる。彼の作風は西川流とも言うべきロマンチズム、エキゾチシズムにあふれており、当時はほぼ唯一の文芸誌オーナーであるということ、この文学傾向とに反発した『文芸台湾』の同人の一部が同誌を脱退し、四一年に『台湾文学』を創刊した。張文環（一九〇九—一九七五）を編集発行人とする『台湾文学』同人は主に本島人作家たちであつたので、以降、内地人作家の『文芸台湾』対本島人作家の『台湾文学』という対立構図がこの時期の文学状況として流布していくことになつた。

(6) 坂口樽子（一九一四—）熊本・八代に生まれる。八代高等女学校、熊本女子師範学校を経て、小学校教員として台湾へ渡る。台湾

で知り合つた坂口貴敏と結婚し、『台湾新聞』や『台湾時報』などに小説を發表。後に『文芸台湾』の対抗誌『台湾文学』に同人参加して活動した。

(7) 浜田隼雄（一九〇九—一九七三）仙台に生まれる。仙台二中から台北高校に進学。東北帝国大学に進んで、国文学を専攻する。卒業後、台湾の静修女学校に教員として赴任。後に台南第二高等女学校、台北第一高等女学校の教員となる。『文芸台湾』に同人参加し、西川満とともに『文芸台湾』の看板内地人作家として活動した。

(8) 例えば『台湾文学』の代表的論客であつた黄得時は、その誌上に『台湾文壇建設論』（『台湾文学』第一卷第二号）「晩近の台湾文学運動史」（『台湾文学』第二卷第四号）を發表しているが、ここで『文芸台湾』及び西川満を厳しく批判している。このとき、黄得時の『文芸台湾』批判と、西川満批判は最早区別されておらず、『台湾文学』が内地人中心雑誌と呼ぶ『文芸台湾』を西川満個人に代表させてしまつている様子がうかがえる。

(9) 中でも、日本語での創作活動を行つていた本島人の多くは東京留学生であつたことは注目に値する。台湾新文学運動については、河原功『台湾新文学運動の展開』（研文出版）を参照。

(10) 『台湾新文学運動』は、一九三〇年代から続いていた近代文学運動だが、一九三七年、当時発行されていた文芸誌『台湾新文学』が経営難に陥つていたところに、同年四月から新聞漢文欄の一斉廃止に伴う台湾島内のメディアにおける漢文使用の禁止措置によって、発行がままならなくなり廃刊された。この時期までの文芸誌は日本語による創作と漢文（北京語白話文・台湾語文など）による創作が混在しており、一方の言語の使用禁止措置が決定的な打撃となつたらしい。河原前掲書を参照。

(11) むしろ、このような状況下で、それでも活発な創作意欲と活動によつて文壇勢力の半ばを維持していた本島人作家の存在が驚異的であり、だからこそ、彼らへの注目が現在まで著しく高いのである。

(12) しかし、内地人と本島人とは、中学・高等女学校・高校・官立専門学校・大学等であらかじめ入学定員の格差が決められており、

もともと内地人に比べて人口比率で圧倒的に多い本島人には不当にその門戸が狭められていた。

- (13) 新垣宏一『華・麗島歲月』（前衛出版社・台湾 二〇〇二）参照。この中で新垣は、自分の師匠である台北高校・台北帝大の教授陣と、西川がどんな親密になっていく様子を感ぜていたこと、しかしその西川の行動力に圧倒されていたことなどを語っている。

- (14) 新垣宏一と台南との関係については、和泉前掲論文を参照。

- (15) 『文芸台湾』は一九四四年一月を最後に終刊したが、これは前年一月に開かれた「台湾決戦文学会議」において、西川が『文芸台湾』『台湾文学』両誌の「献上」を訴えたことに起因していると言われている。この会議後、『文芸台湾』だけでなく『台湾文学』も終刊し、四四年に統合誌『台湾文芸』が創刊された。故に、西川が分裂した同人の再取り込みを計ったという見方が有力だったが、中島利郎・西川満と台湾決戦会議（太田進先生退休記念中国文学論集 一九九五）の中で、この会議以前に、総督府の意向によって両誌の統合は決められており、西川もそれに逆らえなかったことが論証されている。

- (16) 公学校とは本島人児童向けの初等教育機関。国語＝日本語を習得させるのを第一の目的にすることと、内地人児童の通う小学校と区別して設置した。

- (17) 国語伝習所は、日本が領台後最初期に設置した本島人向けの国語教育機関。公学校の設置と共に廃止された。

- (18) 国語学校は、一八九六年に設置された台湾で最初の中等教育機関。一九一五年に台中中学校が設置されるまで、この国語学校と一八九九年設置の台北医学校の二校だけが、台湾島内で本島人が進学出来る中等以上の教育機関であった。

- (19) 例えば、台北の中学校では、内地人中心の台北一中は全定員のうち五名が本島人定員だったが、入学者記録からはっきりと分かる。一方、本島人中心の台北二中でも、定員の三割は内地人枠にされており、明らかに内地人子弟有利の入学者が設定されていた。当時台湾で中学校・高等女学校が設置されていたのは、台北・基隆・

台中・嘉義・台南・高雄・花蓮などの都市であったが、この定員枠の設定方針に差はなかった。

- (20) 山本礼子『植民地台湾の高等女学校研究』（多賀出版）及び洪郁如『近代台湾女性史』（頸草書房）を参照。以下、特に女性史・女子学生に関する論は、ほぼこの両書を参考にさせていただいた。

- (21) 洪郁前掲書より引用。

- (22) ここで言う「旧エリート層」とは、清朝の科挙官僚層出のため朝期以来の富裕層を指す。

- (23) 天野郁夫『学歴の社会史』（新潮選書）を参照。

- (24) (25) 洪郁如前掲書参照。

- (26) 「赤嵌記」（『文芸台湾』第一巻第六号 一九四〇）は、西川満の散文における代表作とされている。四二年一二月に、東京の書物展望社から、その他の短編も同時に収め『赤嵌記』と題して単行本化された。「赤嵌記」は四三年二月に台湾・皇民奉公会の「第一回台湾文化賞」を受賞した。

- (27) (28) (29) 和泉前掲論文を参照。